

## Contents ▶

1 第2回 桜美林大学・明星大学合同ゼミの開催 (報告) 2 IRシンポジウム「日本型大学IRの進化」参加報告 3 活動日誌

## 1 第2回 桜美林大学・明星大学合同ゼミの開催 (報告)

大学教育開発センター IR部門研究員  
人文学系/リベラルアーツ学群 准教授 大中 真

昨年度から新たに始まったこの企画も2年目となった。今年は明星大学人文学部教授の勝又基先生のゼミを桜美林大学に迎え、リベラルアーツ学群人文学系准教授の大中真 (IR部門研究員) のゼミとの合同大会が、2017年10月21日 (土) に大平館A201教室で開催された。

当日は、勝又ゼミ一行16名を、大中ゼミ11名で迎え、人文学系長で博物館学専攻の浜田弘明教授自ら、桜美林資料展示室を案内していただいた。明星大学の学生たちも、桜美林の歴史を知ったのは貴重な経験になったと聞いた。次いで開催教室へ移動し、14時ちょうどから合同ゼミ大会が始まった。

最初は勝又ゼミから発表が始まり、ゼミ内の選抜により選ばれた3名の学生が、それぞれ「江戸時代の屋台」、「幕末志士の手紙」、「黄表紙」という題目のもと、20分ずつ報告を行った。勝又先生は日本近世文学を専門としており、ゼミ生の発表も江戸時代の文献に当たり、一次資料から読み解くという水準の高い内容であった。

休憩の後、大中ゼミの発表となったが、3-4人のチーム3つがそれぞれ「食糧難問題〜どう解決するか」、「北朝鮮問題と日本の対応」、「世界の教育について」と題する報告を20分ずつ行った。大中ゼミでは歴史学、国際関係に関わる幅広い内容の報告となったが、工夫したパワーポイントを用いて全員で役割分担して発表に臨んだ。

続けて全体での質疑応答があり、勝又ゼミ生、大中ゼミ生相互から次々と質問が出て、活発な討論となった。お互いの専門分野が異なるため、逆に知的好奇心から素朴で鋭い質問が出されたのが印象的であった。

最後に勝又先生と大中から講評がなされ、それぞれのゼミから最優秀の報告者と報告チームとにささやかな賞品 (お互いの大学グッズ) が手渡された。合同ゼミが17時過ぎに終了した後、キリスト教センターのご厚意で、荊冠堂チャペルを短時間見学させていただき、特に明星大学の学生たちには印象に残ったようである。



今回の合同ゼミ大会でも、桜美林大学大学教育開発センター、明星大学地域交流センターが後援となり、両大学の関係者のご協力によって、成功裏に行事を終えることができた。また土曜日の午後という時間帯にもかかわらず、大学院大学アドミニストレーション研究科教授で大学教育開発センター長の鈴木克夫先生、同研究科教授でセンターのIR部門主任の浦田広朗先生、健康福祉学群教授でセンターのFD/SD部門研究員の福田潤先生、それにリベラルアーツ学群教授で同学群FD委員長の浅井亜紀子先生が見学に訪れた。この場をお借りして、皆様に感謝申し上げたい。

昨年と今年と、主催校を替えて2年連続で合同ゼミ大会を行ってきたが、双方の学生同士の交流、教員や職員の相互訪問という点でも意義があると認められるので、来年度も舞台を明星大学に移して開催予定である。両ゼミはその後、多摩センターへ移動し、懇親会を行ったが、ここで双方のゼミ生の交流が大いに進んだことを最後に付言しておきたい。

## 2 IRシンポジウム「日本型大学IRの進化」参加報告

大学教育開発センター IR部門主任  
心理・教育学系/大学アドミニストレーション研究科 教授 浦田 広朗

2017年12月5日、大学IRコンソーシアムの主催で開催されたIRシンポジウム「日本型大学IRの進化—IRコミュニティを活用した質保証システムの構築」に参加した（於：上智大学）。

高橋哲也氏（大阪府立大学）による報告「大学IRコンソーシアムの意義」でも紹介されたように、主催者である大学IRコンソーシアムは、文部科学省「大学教育のための戦略的・大学連携支援プログラム」に2009年度に採択された取組「相互評価に基づく学士課程質保証システムの構築」を構成していた4大学（同志社大学・北海道大学・大阪府立大学・甲南大学）が、当該取組の発展・継承を目指して2012年に発足させた大学間ネットワークである。現時点で会員校は54校に達しており、2018年4月の法人化を予定しているという。コンソーシアムの事業目標は、学生調査ネットワークの構築と活用、IRネットワークを活用した相互評価とベンチマーキング、IR人材育成のためのワークショップ事業などであり、会員校は2種類の学生調査（1年生調査と上級生調査。今後、卒業生調査も実施予定）を実施し、同時に収集されるGPA等の教務データとあわせて、調査結果を会員校全体ないし特定大学と比較することができる（データは匿名化されている）。年会費は30万円であるが、調査の実施と結果の分析可能性を考えると安価である。

高橋報告に続いて、福島真司氏と日下田岳史氏（いずれも大正大学）による「大正大学のIR組織とEMIR」、浅野茂氏（山形大学）による「日本の大学におけるIRの現状と課題」、鎌田浩史氏（上智大学）による「上智大学における大学IRコンソーシアム学生調査の活用事例」という報告があり、その後、細川敏幸氏（北海道大学）をコーディネーターとし、報告者をパネリストとするパネルディスカッション「IRコミュニティを活用した質保証システムの構築」が行われた。

報告されたIRの事例は、それほど分析的なものではなく、学生の現状がどのようになっているか、それがどのように変化しているかといった、記述的なものが中心であった。シンポジウムでは「棒グラフ最強」というキーワードが飛び交い、大学執行部に現状や変化を理解してもらうには、簡明なプレゼンテーションが求められるというのが報告者らの共通認識であった。IRは研究のための研究ではなく、組織改善を目的とする研究であるから、妥当な認識といえるだろう。

他方、今回のシンポジウムは学生調査に重点を置き過ぎていたのではないかと感じた。学生がどこから来て、どのような教育を受け、どのように支援され、教育・支援をどのように受け止め、どのような活動をして大学を離れ、さらにその後どのようになったかを、個人を対象とする調査を中心に把握し、大学教育の改善に役立てることはもちろん重要である。この重要性の認識のもと、学生調査を軸とするIRコンソーシアムが発足したのだが、学生調査と同時に、組織（機関）としての大学自体のデータを蓄積し分析することも必要であろう。大学データの代表は財務データであるが、他にも学生数、教員数、開設・開講授業科目数、開講授業コマ数など、日常の教育・研究活動の中から多様なデータが自然に発生する。個人データの集積が大学データであるとも言える。その中の基本的なものは文部科学省「学校基本調査」や日本私立学校振興・共済事業団「学校法人基礎調査」などに対する回答にもなっているが、これらを外部に報告するだけでなく、学内で共有し分析することからも、大学教育の適正化にとって有益な情報を引き出すことができるはずである。この意味では、浅野報告において「学校基本調査」の「出身校の所在地県別大学入学者数」データ（いわゆる県県マトリクス）の活用法が説明されていたことは意義深く感じられた。

## 3 活動日誌

- ・10月22日（土）第2回桜美林大学・明星大学合同ゼミ開催（研究員4名）
- ・12月5日（火）大学IRコンソーシアム主催IRシンポジウム「日本型大学IRの進化—IRコミュニティを活用した質保証システムの構築」参加（研究員1名）
- ・12月18日（月）大阪経済大学来訪（研究員3名）

編集発行：桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 其中館1階 101

E-mail : [fdcenter@obirin.ac.jp](mailto:fdcenter@obirin.ac.jp) Web : <http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/>